

【A 夫・A 妻との話し合い】全テープ起こし

開催日：平成28年（2016年）9月22日（9月6日に我が家にA夫妻は初訪問）

場所：団地集会所にて

参加者：A 夫、A 妻、団地組合員 T 氏、藤井将登、藤井敦子」

※ 聞き取り不能な個所は（不明）とした。

（団地集会所に入る）

藤井将登「こんにちは。お疲れ様です。いつもお世話になっています。」

団地組合員 T 氏「こちらこそ。今日寒くないですか。もしよかったら暖房入れない？」

藤井将登「いいです。どうですかその後？」

A 夫「臭いんだ」

藤井将登「臭い？毎日？」

A 夫「ええ。毎日。毎日。」

A 妻「耳が遠いんで。耳が遠いんで。自信がないんですよ。」

A 夫「そんでね一応。ちょっとね、まず最初に私らのちょっと、話を聞いていただきたいんだけど。」

藤井将登「（敦子に向かって）毎日臭いんだって。」

A 夫「それで一応作ってきましたんで（と全員に作ってきた書面を配る）。」

藤井将登「変わらない。全然？」

A 夫「あの、T さんからちょっと話して」

T 氏「僕も別に話すことないんで。今日はお話し合いしたいということだったんで。」

藤井将登「この前お話ね、だから。」

A 妻「（机）くっつけてくれます？耳が遠いんで。」

A 夫「それとね、ちょっとね、年でね、あの、耳がね、遠くなったんで。老人性のね。老人性の何だっけ？」

A 妻「そう」

T 氏「まーそういうことでお話し合いしたいということだったんで、それでお電話して、まーあの、両方オッケーということなので、場所だけ借りましょうと。いうことで、なったと。いうことで、ま、私はよく内容もわからないし、お互い祖語があるかもしれないし、思い違いもあるかなと、両者から聞いてね。だからま、その辺を正して、まーどうすんのということをお互いに話し合っ、胸襟開いて、お互いに近いんだし、団地の中の話だから。私も公害とかそういうことは、振動とかね排煙とかね、騒音とか、そういうことは工場で当然（不明）住民とやらないけませんので、そういうことはやってきましたけど、排ガスとかね。だけあまりこういうこと（タバコの煙）はよくわかりませんので、両者でよく納得いく話し合いをしていただければ、それはそれでいいんじゃないですか、という風に思いますんで、ま、じゃあ最初、A 夫のほうからご説明したらどうですか」

A 夫「じゃあ すみません、今日あのう...」

藤井将登「だからここ（A 夫が配った資料）に書かれてることですよ？」

A 夫「え？」

藤井将登「ここに書かれた通りのことですよ？」

A 夫「そうです。あのう、T 氏にちょっと間に入れてもらって」

藤井将登「はあい」

A 夫「今日お時間を藤井さんご夫婦にもいただいて申し訳ないですけど」

藤井将登「はあい」

A 夫「一応、あのう、うちらで今困っていることを、ちょっとあの、書き出してみました」

藤井将登「これって、前回（9月6日）お聞きいたしました。はい、このことは。」

A 夫「それで、まず最初に あのう タバコの副流煙による健康被害ということで、私の家に今、色んなこうタバコの副流煙が入って来るんで、非常に困っているということと、それで、この副流煙てのは、普通タバコを吸われるかたの52倍くらいの有害物質・発癌物質を結局吸うようになっちゃうという、それを常時吸うようになるってのが非常に健康に、あの一非常に、あの、辛い思いをするということなんですね。で、今、我が家の問題点ていうのは、タバコのこの副流煙が、日中から深夜まで、長時間、うちの中に入って来るんです。で、窓を閉め切っても、窓のこの隙間から、少一しずつこう入って来て、で、それがうちの中に充満して、それで色々もう、ちょっと、非常に辛いっていうのが、（不明）なんですよ。それで、この、副流煙のために、

家族に今、喉だとか頭だとか吐き気だとか、喉の痛み、胃腸の炎症、それで女房は喉の奥から、食道まで低温...あの、何ての？」

A妻「やけど... 低温... (咳)」

A夫「じゃあ、なんか、非常に、こう今、お医者さんとも相談して...」

藤井将登「低温やけど??」

A夫「で、これ、」

A妻「したような、って、て言ったらいいですね。ふう～ (溜息)」

A夫「これ、(不明) 言われているんですよ。 で、結局、今のこのタバコっていうのは、今入って来ているタバコっていうのは、普通の国産のタバコですと、ご承知のとおり、タバコの...タバコだ！っていう臭いがして、それでスーっと消えちゃうんです。ところが今回のこのタバコっていうのは、ゆっくり、こう入って来て、そのまんま、じわ～～～とこう、部屋ん中にこう、拡がって来るんですよ。で、長い間そのまま、あの、留まってるって、っていうことでね、結局、私らの夜寝る時もマスクをして、しないと、寝れないような状態なんだ。」

藤井将登「そうですかー。」

A夫「で、これって非常にねえ、私ら毎日マスクして寝るっていうのはねえ、非常に辛いことなんだ。」

藤井将登「うん、大変ですよねえ、それはねえ。」

A夫「もう鼻がねえ、もう詰まって来る、やっぱり、こうやって、だけどそうしないと、マスク取ると、煙の臭いがもう、充満しちゃうんで。」

藤井将登「マスク取ると (臭いが) よく分かりますよね。」

A夫「ええ、ええ。そりゃあねえ、ですからねえ、藤井さんねえ、あの、お互いにこう、話し合って、で、何とかしたいんですよ。」

藤井将登「はあい」

A夫「これが、ひとつ。それからね、こちらはそれだったら、まず、空気清浄機をね、設置しようってことで、設置したんですよ。」

藤井将登「うーん」

A 夫「ところが、通常のこの3万とか4万（円）とかぐらいの清浄機、あの、空気清浄機だと、この、普通の臭いは取れるんですよ。取れただけどこの、有害物質の気体状つつうのが、この、これ、仕様書にも書いてあるんですけど、取れないっていう...」

藤井将登「ふうん」

A 夫「でね、結局有害物は全然取れないわけです。という状態が続いちゃうわけです。そうすると、意味が無いわけですよ、この、このぐらいの空気清浄機では。」

藤井将登「でも、臭いは取れたんですか？」

A 妻「取れない。」

A 夫「臭いは、少し取れるんです。取れるけれども、」

A 夫「甘い香り。」

A 夫「結局」

藤井将登「まだ臭い？」

A 夫「また、けどね、そんなことない、取れるんですよ。」

藤井将登「うん」

A 夫「ずーっとなんてまた入ってくるんです。あ、取れたなあ、と思うとまた入ってくる。すーっとなんて。で、まあそういうのが私ら今困っていることなんです。で、じゃあ、あのう、どっからこのタバコの副流煙が入ってくるか、あの、前にも一回目お話しした時にもお話ししたように、どっから入ってくるのかな、っていうので調べてみた。で、まずねえ、風の流れを調べた。」

藤井将登「これ、この前もおっしゃってましたねえ」

A 夫「これ、これがね、え？」

藤井将登「おっしゃってましたね、この前もね」

A 夫「それでね、今、2号棟ってのは、この図にあるように、一階が B さん、それで藤井さん、C さん、D さん、それから二階が E さん、F さん、A（控訴人宅）、それからこの、あの、隣りは不在なんです。留守宅なんです。こういうのが今2号棟の、だいたい、うちの2号棟の、私の、あの、二階ですと、煙が入ってくるっ

ていうのは、だいたい煙っていうのはご存じのとおり、あの、上から下に行かないですよ。下から当然、上に上がって来ます。そうすると、上がって来るのは、やっぱりこの一階、あるいはこの、せいぜい F さんの辺りから入ってくるから。これぐらいが、まず、あの、限度じゃないかな、と思うんです。で、あのう、風が、じゃあどういふふうに吹いているか、私は風向を調べたんです。そうしますと風は、ちょうどバス通りのこの B さん、藤井さん側から、風が、南側もそれから北側も、こういうふうに吹いて来ているですよ。うちの方に、こういうふうな。これが、ほとんどこういう風なんです。で、これはもう分かったんですよ。じゃあ、風はこういうふうな吹いている。で、その次に、じゃあ、あのう、この、タバコの副流煙が、入って来んなあという感じだけ、じゃあ、風ってどういふふうに吹いているか調べた。してみると、やっぱり、この、B さん、藤井さん側から、風がこういうふうに来て、こういうふうな吹いてるんですよ、ほとんど。それで、じゃあ、あのう、この人たちで、タバコを吸うの、吸うご家庭で、どのぐらい居るのか調べたんですよ。そしたら、B さんは吸わない、E さんも吸わない、F さんも吸わない、C さんも吸わない、D さんも吸わない、吸うのは藤井さんだけってことなんです。これだけは分かったんですよ。」

藤井将登「ふん」

A 夫「それで、まあ、それで、結局、あのう、それじゃまず、あの、藤井さんとこにあのお話し合いに行こうということで、あのう（9月）6日の日、行きましたよね、午後に。それで、その時に、お話しは、あの、ご主人のお話しは、タバコを私は吸うけれども本数は少ないんですよ、っていうお話しでしたね。」

藤井将登「うん」

A 夫「それからタバコの種類っていうのは、あの、ガラムのクローブっていうのと、コルトのバニラ味・手巻き」

藤井将登「うん」

A 夫「これを吸います、と。」

藤井将登「うん」

A 夫「で、これをサンプル私、戴きました。」

藤井将登「うん」

A 夫「で、吸うときは私は換気扇のところで吸います、と」

藤井将登「うーん」（この言い方が後日問題になる。煙草は防音室で吸うが、防音室の煙が A 宅に行くわけがないので、可能性とすれば換気扇しかないなので、換気扇で吸うことはほぼほぼ無いがこのような答え方を夫はしている。）

A 夫「しかし、あの、私が、藤井さんの奥さんに、その前に逢ったとき、」

藤井将登「うん」

A 夫「ねえ藤井さん、お宅、タバコ吸わないって言ったら、なんかうちの主人も吸うけれども、うちは大丈夫よ、防音室で吸ってるから、煙は入って、いや、あの、外へなんか絶対出しませんよ、というお話、ですよえ。」

藤井将登「そこからか。そこ（防音室）からは（タバコの煙は外に）出ないってということだよな？」

A 夫「だけどー、と、これがまずね、第一ね。」

藤井将登「まあいいや、うん」

A 夫「それから、もうひとつは、あのう、ご主人は吸うけれど、ご主人の話で、奥さん、お嬢さんは吸わない、って」

藤井将登「うん、吸わないですね。僕だけですね。」

A 夫「ええ」

藤井将登「うん」

A 夫「それから、藤井さんのご主人は、もし自分がタバコの煙が問題あるのならば、家として対応考えます、というお話しでした。」

藤井将登「はい」

A 夫「それで、けどもこの時点では、まだ、ハッキリしなかったんです。で、（不明）次にですね、」

藤井将登「総括！（A 夫の出した書面に書いてある文言を読む）」

A 夫「二枚目、で、」

藤井将登「総括。はい。」

A 夫「これで見ますとね、私が今まで調べたのでも、風はほとんど B さんと藤井さんから吹いているっていうのと、2号棟の一・二階のタバ...かたでタバコを吸うご家庭は、藤井さんとこしか居ないっていう。それから、」

藤井将登「私のところ、っていうか、私だけ、ね？」

A 夫「ええ。 タバコの副流煙は、国産のタバコにはない、」

藤井将登「うう～ん」

A 夫「国産のタバコってのは、こんな臭いしないんですね。調べても。それで、必ず、この、あの、国産のタバコってのは、タバコの香りがして、タバコ、っていう臭いがして、それで消えちゃう。ところが花の香り、バニラのような甘ったるい、甘い特徴のある...」

藤井将登「この前は『バニラのような』ってことはおっしゃって無かったですね？」

A 妻子「ない。そうです。」

藤井将登「ね？わたくしがサンプルあげてからですね？これはね」

A 妻「どちらかという、花の香りのほうが強い」

A 夫「それと、これはねえ、あのう、わたくし、あのう、ネットで調べたんですよ、だからこのタバコってのは。それで、藤井家との話し合いで、ご主人から得た、サンプルをもらった、この2本のタバコの香りと、やっぱ、あの、合うんですよ。で、この、それともねえ、あのう、ご主人が、外出中でもねえ、あのう、藤井さん側の方から、この、国産のタバコでない、花の香りのような、この、副流煙が入って来るんですよ。」

藤井将登「んん？？？ どういうこと？これ」

A 夫「これはね、ですから、

藤井将登「どういうこと？これ」

A 夫「例えばね、あのう、ご主人が、あのう、私もほら、ずっと隣りで承知してますから、お宅はあのう、パジェロに乗ってるじゃないですか。」

藤井将登「はい。」

A 夫「あ～、お出かけになってんなあ、って。けども、この、タバコの煙は入って来るんですよ。」

藤井将登「ほお」

A 夫「っていうことは、」

藤井将登「うん」

A 夫「あのお、ひょっとして、あの、奥さんか...」

藤井将登「(笑) まだ疑っていらっしゃるの？ふ～うん」

A 夫「そういうことでしか、考えられないですよ。あのう、これが国産のタバコだったら分かります。だけど、この、同じ臭いなんですよ、それがひとつ。」

藤井将登「ん～～、(苦笑)」

A 夫「で、もうひとつは、まあこれ、あとで判断していただきたいんですけど、それから、うちの女房なんかの副流煙の件で、あのう、携帯電話で、あのう、奥さんに、藤井(敦子)さんに、あのう、話したとき、そのときの会話で、あのう、」

藤井将登「ん？ん～？」

A 夫「うちの女房が、葉巻を吸っているの？と訊いたら、あのう、奥さんは、葉巻は吸ってないよ、私は花の香りのするタバコを吸ってるよ。」

藤井将登「ん～～。ん～？ん～？」

A 夫「花の香りはすぐ消えてしまうからAさんのところに(藤井敦子『聞きまちがってる。』)臭うはずがない、と話されてる。ということは、あのう、奥さんもタバコを吸って、ご主人が居ないときもうちの方に入って来るってことなんですよ。」

藤井将登「(笑) はい。」

A 夫「だから、ただ、これはこれでもいいんです。問題ないですよ、私らは。とにかく私らは、あのう、この、結論的に言ってね、あのう、タバコは、この状況から云ったら、入って来るんだよ、藤井さんところから、うちのほうに入って来てるわけですよ。だから、これをなんとか、あのう、入らないように、それでうちの健康被害無いように、していただきたいというのが、うちの、あの、要望なんですよ。」

藤井将登「ふむ」

A 夫「で、あのう、ここに下に参考で書いてあるんですけど、今あのう、藤井さんところで吸ってるタバコってのは、あの国産のタバコより、ものすごくあの、非常にこの、害が大きいあのう、副流煙が多いタバコなんですよね、調べても。」

藤井将登「ふん」



A 夫「たとえばあのう、セブンスターだと14ミリ。だけどガラムのだと、これの40ミリ」

藤井将登「タール多いですね。うん」

A 夫「4倍近く...、近い、そういうねえ、副流煙なんですよ。それがねえ、わたしは喉が痛いとか、あのうそれから、あの病院行かなくちゃいけないとか、あのう、これはとてもじゃないけど、あの例えば国産のタバコをちょっと吸うぐらいだったら、私はそれほど、あのう、恐らくね、こんなことにならなかったと思いますね。そんだけを、ぜひ善処してもらいたいってのが私の願いです。」

藤井将登「分かりました。」

A 夫「もし、反論があるんでしたらお話しいただきたいと思います。ただ、あのう、今は T さんをご承知だけでも、これは此処だけで、あのう別に、話がそれで、うちらの方にタバコの煙が入って来なかったら、それで終わりですよ。」

藤井将登「うん」

A 夫「それ以上は望まないし、それ以上でもないし、それ以下でもない。と、うちらとにかく健康被害を、あのう、やめて貰えれば、あのう、防止出来ればそれでいいっていうだけです。この話はこれで終わりにします。」

藤井将登「はい」

A 夫「というお願いなんです、ご主人に、頼みます」

藤井将登「はい、以上...ですか？よろしいですか？」

A 夫「ええ」

藤井将登「よ〜く、分かりました。」

A 夫「はい」

藤井将登「これ、まあ、前回（9月6日）とほぼ一緒なんですけど...」

A 夫「ええ」

藤井将登「え〜っと、ちょっと気になるのがですね...」

A 夫「いいですよ」

藤井将登「この、妻のことなんですが...、これは、こんな電話でこんな話をしてるんですか？（敦子に尋ねる）」

藤井敦子「あたしが返事したときには、あの、書いた言葉ではなくて、口頭で気さくに喋っているの、『わたしはね』という、その主語の部分っていうの...」

藤井将登「あああ」

藤井敦子「そういう、まあ、喋りながら、今でもこうトツトツとしゃべる部分を曲解されて、『わたしは』というところと『花の香りを...吸っている』というところの主語と動詞が結びついたという、奥様による曲解だと思います。」

A 妻「わたしは、耳がすごくいいんで、あの、間違いなく藤井さん、そうおっしゃいました。一言一句覚えてるんです。」

藤井将登「ははあ...」

A 妻「何故かっていうと、わたしは凄く真剣でしたから、今回のことは。ですから携帯電話した時に、私は花のタバコは吸ってるって言ってました。」

藤井将登「あのね、基本的に、彼女（藤井敦子）は吸わないんですよ。」

A 妻「じゃ、どうして藤井さんのうちから...その...」

藤井将登「でね、でね、」

A 妻「クローブの、香りが流れて来るんですかね？」

藤井将登「でね、で、あれからですね、ここ、いちばん肝心なところなんですけども、まず、まず妻は全く吸わないんですよ、ホントに。」

T 氏「うん、」

藤井将登「ね？（敦子に向かって）大昔は、逢った頃の若い時にはキミ、吸ってたかな？」

藤井敦子「若い時に吸ってました。」

藤井将登「吸ってた??」

藤井敦子「格好つけるぐらいの」

藤井将登「あ、ほんと。でも、あのう、ぼくの覚えてる限り、まったく吸わない人なんです。だから、多分それは、電話上の、なんか聞き間違いってどうか、」

藤井敦子「じゃあ私の言い間違いとか？」

藤井将登「うん、言い間違いは多いけどね。」

A 妻「あのさ、でもさ、藤井さん、いつかさ、私はね、タバコを吸うこともやめることも簡単に出来るよ、出来るのよ、って言ったの覚えてますか？そういう発言されたの。」

藤井敦子「いつ？」

A 妻「わたしは、タバコを、」

藤井敦子「だから、昔、吸ってましたから、やめたとき、えっと気管支炎になってピタっと...」

A 妻「だったらやめてもらいたい」

藤井将登（笑）

藤井敦子「いや、もうずっと前の話ですよ？」

A 妻「いや、その話は最近ですよ？」

藤井敦子「だから私は出来るのよっていう発言は、私がそういう人間だということで、かつてタバコをやめた時に、『やめられない人が十年もかかることを一発でやめることが出来たから』自分はそういう人間だ、というお話しをしたということだと思いますよ？その話自体は記憶は無いですけども。でも、その話を、過去の話をしたことが、どうして、今、私がしているという風に曲解されるのかが私には理解が出来ませんね。」

A 夫「まあ、その話は別にしてね、こういうこともあったんですよ。ご主人が、なんかほら、ここ、この6日以降、あの、2、3回、あの、外に外泊...車で行かれてたりされてるのしてますよね？」

藤井将登「へっ？？？」

A 夫「車で、あの、外に出られて、一晚帰って来ないってこともありましたよね？何回かね？」

藤井将登「ええええええ？いちいち覚えてないですけどね。」

A 夫「あの、それでね、」

藤井将登「そこまでチェックされてるの??」

A 夫「私が、ご主人がああ～、また（タバコの副流煙が）入って来てんなってんで、私、夜の10時、11時に外出て見た時に、ああご主人居ないんだ～と思って、車、見たことあんだ。それで、それでも（タバコの副流煙が）入って来るから、ああそれじゃあ、入って来るって、こう、11時頃の、こう、うちの2号棟こうして見るんですよ、そうするとみんな電気消えてるんです。で、後ろひっくり返して（南側のベランダにまわって）、ホテル族居るかなあと思って見るんですよ。居ないんですよ。」

藤井将登「ん??」

A 夫「ホテル族って、要するにベランダでタバコ吸う人居るかなあと思って、見ると居ないんですよ。誰も吸ってないの、2号棟で。」

藤井将登「う～ん」

A 夫「それで、外の、前に藤井さんが一回目に話した時に、ひょっとしたら外で、あのう、あそこの駐車場の、あのう、停留所の辺りでたむろして吸ってる人居るかもわかんないよって言うんで行ってみるといい。で、あのう失礼ですけど、唯一電気ついているのは藤井さんところだけなんです。」

藤井将登「うーん...」

A 妻「1時くらいに何回もね...。何回もなんか...」

A 夫「それで、だからね、ただね、それは、恐らくね、言った言わない、見た見ない、水掛け論だと思うんです。」

藤井将登「ん?何のですか??」

A 夫「今のこういう話はね、例えば藤井...ご主人は、うちの女房は吸わないって言うし。」

藤井将登「あああ。」

A 夫「うちの こういう風に話して、それで見てもこうだと。だけどこれがねえ、結局、藤井さんのお宅に入って、それでタバコ吸ってるの見るわけじゃないし見たわけじゃないし、」

A 妻「ただ、なんでいつも換気扇の下にね、居るかなあってのは感じてました。ご主人が居られないのに、タバコの煙が日中からした時に、藤井さんのところに何回も行くと、いつも換気扇の下に、あの、姿が見えてるんですね?彼女（敦子）の声とか姿が。」

藤井将登「えっ?!」

A 妻「それで、こないだ、おうちに上がらせていただいた時に、換気扇の下で吸ってるっておっしゃってましたよね？」

藤井将登「私がね。」

A 妻「そうそうそう、だからあの換気扇の下にご主人が居ないのに、いつも居てそこで吸ってるってのも、もう何回も!もう、車が有るか無いかだとか...」

藤井将登「え?吸ってるのを見られたんですか？」

A 妻「見て、見ないです、その...換気扇の」

藤井将登「誰か、人が居るのが見えた、と、換気扇のところに？」

A 妻「そうです、そうです。ま、まあ、女性です。だから、あー藤井さんはすごくお料理 (笑)」

A 夫「結局ねえ、今言ってるのはねえ、それはご主人も、あの、言われるの理解できますよ。」

藤井将登「んん?な、何がですか?何がですか？」

A 夫「あの、それはね、あの、『見てないでしょ?』っていう話ですよ?そりゃ、本人(敦子)が吸ってるのがね、奥さんが...、これがね、」

藤井将登「いや、だいたい、吸ってないんですもん、だって (笑)」

A 夫「う〜ん。だから、そしたらねえ、誰かが吸ってる、吸ってるんだよ。だけど、入って来るんだよ、いない時でも、いない時でも。いない時でも。」

藤井将登「もちろん、うちの子供も吸わないですしねえ...」

A 妻「大半がね、(咳) ごめんなさい、クローブでしたね、インドネシア産の。あっちの臭いは多いですね。バニラは許容範囲かなあ、っていうぐらい。ちょっとあたしもバニラだと思ったんで。」

(集会所入口から業者の声が聞こえる。)

藤井将登「でね、」

A 夫「結局ねえ、タバコが、この、うちに入ってくる種類ってのは、この2種類なんですよ。」

A 妻「バニラ味と...」

藤井敦子「ちょっとこの辺で中断しましょうか。なんかどなたかみえたので。」

藤井将登「ん？」

=====集会所に宅配便が来て数分中断後、再開=====

A 夫「だから、今ところ、私どもの、風の向きだとか、それから、この辺にそういう吸うような人居ない、それからタバコの種類ってのはこの、こういう花の香りする、それがこういうふうのうちに入って来る、それは間違いない事実であって」

藤井敦子「間違いない事実、なんですね？入って来ることだけは事実ですよ？？ だから、それがどこから出处かっていうことを、その一、うーんと、疑いを持ったり、思い込みであったり、であるのはいいけど、それは事実とは違いますよね？それについては証明する必要がある、ありますよね？」

A 夫「ただ、あのう、ですから私は断定的な言い方してません。ただ、あの、状況の、この状況を見ると、風はいつもこっちからこう吹いて来る、それでこっちには」

藤井敦子「単純な疑問なんですけど、

=====以後、しばらく団地の部屋と風向きの談義が再び続くので、省略=====

藤井将登「んで、(A さんいわく) タバコの煙は上に上がるでしょう？と。上に上がるでしょう？と。で、風、こっち向いているから、ちょうど、A さんの所にこう行くじゃないですか、っていうようなことですよ？」

一同「そうですね」

A 妻「そうです。30年間、ふっ(笑)あのタバコいろいろ、おやじタバコも入って来ますけど、この甘い香りのタバコはもう、本当に、近隣でも藤井さんの(不明) 」

藤井敦子「で、さっきのなんかさ、T さんに聞いて欲しかったこと」

藤井将登「ん？」

藤井敦子「T さんに」

藤井将登「あ、んでね、でね、今、ちょっと、とっても困ったのは、ちょっと、その、妻のことを、持ち出される...」

T氏「あ、はい、事実関係がね。」

藤井将登「うん」

T氏「う～ん」

藤井将登「え～と、それは、妻、吸ってないもので、ね、いくら疑われても、いや、こういう、こんな事言った、え～と、姿が見えたとか何かね、そういうこと言われても、妻、吸ってないですから。ね、あのう、大変困るんですよ。あの、その事実を、『いやそうじゃないって。あなた嘘を言ってる』みたいなこと言われても...」

A妻「いや、そんな嘘言ってるなんて思っていないですけど」

藤井将登「いや、じゃ、じゃあ単に妻、吸ってないですから、ね？ね？」

A妻「じゃあもう、藤井さんに探してもらいたいですね、じゃあ、吸ってる方を。このグループ（注：クローブ）っていう...」

A夫「みんなで、みんなでね、あのう、じゃあ、どっからこの...」

藤井将登「ちょ、ちょっとよろしいですか？あの、Aさんのことは、お疑いになってることとか、困っていらっしゃることはよ～く分かりました。前回の話しとほぼ同じです。ね？よく分かりました。ですが、で、ここに書かれているような、ちょっと妻がどうこう、どうのっていうことは今言ったように、ありませんので、そこはどうか勘違いというか、なさらないように、疑いを持たれないようにお願いをいたしますね。妻、吸ってない、吸わない人ですから、このひと。」

A妻「じゃあ、ご主人が結構、すごいヘビーに吸ってるんですか??」

藤井将登「で、次、私なんですけれども、この問題、この前（9月6日に）聞きましてから、私、タバコ吸ってないんですよ。ね？おうちで吸って無いんですよ。」

A夫「今、全然？」

藤井将登「はい。」

A夫「全然吸ってないんですかあ？」

藤井将登「吸ってないんですよ。」

A 夫「おおおおおおおおおおお」

藤井将登「で、それなのに、こういうふうには、まだね、臭いが、タバコの副流煙が、で、臭いが、っていうことを、で、今おっしゃられたように、私が居ないときも、ね？チェックされてるわけですよね？夜中、朝まで帰って来ないときも、臭ってると。」

A 夫「うん」

藤井将登「ということは、じゃ、もしかしたら、え～、何か他の理由なのか、もしくはうちの理由だとしても、なんかうちにも臭いが溜まって、それが常時、こう行っている、とかね。そういうことしか考えられないんですよね？だって、うちで吸ってないわけですから。」

A 夫「じゃあ、ちょっとお訊きしたいんですけど、あの9月6日、うちら、お話し合いしましたよね？そのあと、ご主人は、うちじゃ吸っていないんですか？」

藤井将登「吸ってないですよ」

A 夫「おおおおお。」

藤井将登「どうでしょう？」

A 夫「もし、それだったら、他から入って来てるってことですかねー？」

藤井将登「っていうことになるじゃないですか。ね？」

A 夫「はあ。ただ、あの、この状況でみたら、じゃあ、どっ... これ、うちらで、なんでこの図面付けたかっていうと、うちのこの、この、うちの、この2階から見たら、これ、せいぜいコレぐらいが、タバコが入って来る、そういうのでこの図面付けたんですけど、これを広めなくちゃしなくちゃいけないってことですかね？」

藤井将登「はい？」

A 夫「これ、この図面からまだ抜けなくちゃいけない、ってことですかね？」

藤井将登「いやあ、(それは) わかんないですけどね。 そんな、臭いが、その、例えばその、なんかでサンマ焼いたとかね、そういう煙がこう、行くのは分かりますよ？その時に臭うのも分かりますよ。でも、そういう、なんか火元がない、煙が立っている状態じゃない、つまりタバコを吸ってない状態で、なんかしらの臭いがそうやって行くっていうことは、よっぽどなんか強い臭いが溜まってるとかね、じゃないとあり得ないんじゃないかな？と思うんですよ。」



A 夫「あのねえ」

藤井将登「で、そこの理由についてはちょっと分かりません、僕らね。」

A 夫「うん、うん」

藤井将登「少なくとも、言えるのは、もちろん妻でも、妻は吸わないひとだし、私のタバコでも無いんじゃないの？っていうことなんですよ、結論言いたいのはね。」

A 夫「うーん、今ね、あのう、うちらに入ってくるのが、例えば朝の午前中の11時ぐらいまでは、臭い、一切しないんですよ。で、夜、それまでのタバコの臭いって一切しないんですよ。それから夜は、あのう、12時半とか1時ぐらいになると、あの、こう、初めてうちがこう開け始めるんですが、(臭いが)しないんですよ。」

藤井将登「夜の、零時半？」

A 夫「零時半から1時ぐらい。そうすると、結局、昼頃から、その、夜中の11時12時ぐらいまで入ってくる、ってことなんです。」

藤井将登「ふむ」

A 夫「で、その、午前中、それから夜、それは入って無いてことは、誰かが吸ってなかったら、あの、その、うちの中にこもった、その、なんかの臭いとかなんかじゃなくって」

藤井将登「じゃないよねえ？」

A 夫「ねえ。それは違うと思うんです、たぶん。誰かが、そういう、あの、吸ってないと、そういう現象って起きない訳ですから。で、私らがその、午前中、夜中の12時とか1時になって、煙が入って来なくなると、ホッとするんです。あああ、これで今日もようやく入って来なくなったと。」

藤井将登「それってねえ、時間帯もハッキリしてらっしゃるんだったら、でも、でも今、先ほど、あの、夜、その、私が一晩居ないときでも臭っていた、っておっしゃってたじゃないですか。」

A 夫「うん」

藤井将登「それは、その夜中12時半からのあとの話ですよ？」

A 夫「え？」

藤井将登「12時、零時半よりあとの話ですよ？それは。1時とかおっしゃってませんでした？さっき、ね？」

A夫「あの、今言ったのは、あの、要するにうちらが寝ついて、それで1時半頃になって目覚めてちょっと開けたら臭いしなくなったから、ちょっとダーッと全部開けて、夜中開け始めるんですよ。うちは。その前までは12時とかそのぐらいまでは入って来てんですよ。」

藤井将登「ん？」

A夫「ま、それは、毎日時間をつけてるわけじゃないですから、何時になるというそりゃ、はっきりした、あの、今日は何時とか、そういうことは云えない。...」

藤井将登「まあまあ、私もそこは、別に何時でも構わないんですけど。その、私の生活時間帯とも合わないし、だいたい、あれからは吸ってないから、ね？そのタバコの副流煙ではあり得ない。そのことでは無いんだな、と。うちの、私の吸ってたタバコの副流煙ではとりあえず無いんだな、ってことは分かった訳なんですよ。」

A夫「う～ん、うん、うん」

藤井将登「ね？で、そしたらあとは、考えられるのは、もう染み付いた臭いとか、ね？以外には無いじゃないですか。」

A夫「ただ、染み付いた臭いだと、あのう、あ、うちにですか？」

藤井敦子「ん～」

藤井将登「わかんない、わかんない。なんだ、なんだろう。例えば、うち、うちから、うちに染み付いた臭いがそっちに流れるとか。でも、この前、あの、ねえ、来ていただいて、そんな臭いしてなかったでしょ？家の中にね？」

A妻「甘ったるい感じの。」

藤井将登「へ？」

A妻「甘ったるい」

藤井将登「この前、そんなことおっしゃってなかったじゃないですか。」

A妻「甘ったるい感じの、なんか、あの、」

藤井将登「アレ??」

A妻「なんていうんだろう？まあ、芳香剤みたいな...感じはしました。」

藤井将登（苦笑）

A夫「ただ、それねえ、常時だったか...」

A妻（藤井敦子に）「藤井さん、ホント吸ってない？」

藤井敦子「じゃあ、奥さんの言い分、聞きましょう！ハイ、どうぞ、はいどうぞ。」

A妻「私、ちょっとね、あの、書いて来たんですけど（と手紙を出す。[資料2]）」

藤井敦子「はいはい、いいよ、いいよ？どうぞ？」

藤井将登「あ〜ちょっとお、もう、俺、5分くらいのことだろうと思ってたんですけど...」

藤井敦子「読ましていただいていたいいですか？」

A妻「あ、読ましてっていうか、読みますよ、私が。」

藤井将登「いやいや、時間かかるから。ふ〜ん。」

A妻「あ、そうですか？じゃあ」

藤井敦子「はいはいはい」

藤井将登「なあに？」

藤井敦子「えっと、」

藤井将登「ああ、細かいね。えっと、タバコの喫煙の件ですが...敦子に葉巻を吸っているのですかと...」

A妻「それ、敦子さん宛てなんですけど。」

藤井敦子「じゃあ、私が読みますよ、はいはい。」

藤井敦子「藤井敦子様、9月22日、タバコの喫煙の件ですが、最初に敦子さんに『葉巻を吸っているのですか？』と携帯でお訊きしたところ、『葉巻は吸ってないよ。主人は白い紙で手作りのタバコを吸っているし、しかも防音室でしかタバコを吸わない。私は花の香りのタバコを吸っているけど（苦笑）、

花の香りは吸った時だけですぐ消えてしまうから A さんの家に臭うはずがない』と言いました。

28日（注：28年の誤り）9月6日、藤井家を訪問。敦子さんの... 敦子さんとご主人の優しさを信じ、私はご夫婦に対し、タバコの件をお話いたしました。話し合いの中でご主人は、自分はタバコは換気扇の下で吸っている、奥さんは吸わない、とのことでした。ご主人はコルトのバニラ味・手巻き、ガラム・クローブを喫煙しているとのこと、ご主人は自分のタバコが原因なら家としても対応しなければいけないと言って下さりホッといたしました。南側・北側ベランダに濃厚に充満する花のような甘い臭いやバニラのようなタバコの副流煙は、今なお我が家を苦しめております。私は真摯に誠実に話し合い、ご理解いただけたと思っておりましたが、全く改善されず、大変遺憾に存じます。

受動喫煙の自衛のため、我が家では全ての窓を閉め切る、ん？ 全ての窓を全開、24時間常時換気、家庭内でのマスク常用、しかたなく空気清浄機の設置、いずれも全く効果なく、甘ったるいタバコの副流煙が全部屋中に充満してきます。家族は喉、痰、頭痛、吐き気、胃腸の炎症、また私も喉の奥から食道まで低温やけどをしたような酷い痛みと現在通院し、医師とも相談しています。

近隣からも、困惑の声が上がっています。藤井さんのベランダから、頻繁にタバコの煙が入ってくる。最近、咳が出始めた。ベランダに充満している甘ったるい変な臭いを何だろう何だろうと思っていた。甘い花のような臭いなのでタバコだとは認識できない、などなど。近隣には我が家を含め、肺疾患、脳血管障害、癌など、手術や治療中、経過観察の方々も多く居られます。健康な人はもとより、病人にとって副流煙が一番の害です。本人が吸い込む主流煙よりも周りが吸い込む副流煙のほうが有害物質が多く、発癌物質は主流煙の...主流煙のおよそ52倍とされています。

緑が多く、澄んだ空気を吸うことの出来る環境をありがたく30年間生活しておりましたが、春頃より、幸せな...幸せの澄んだ空気を奪われてしまったようで、知らず知らずに吸い続けていた副流煙で、我が家は家族が全員健康被害で苦しんでおります。近隣でも、...アア～？... 甘いタバコの煙の件が出始めて来ました。一般的な国産？日本製タバコは空気中の上へとすぐ流れていきますが、藤井さんが吸われているタバコは、甘い臭いの副流煙がベランダ中に、午前中11時前後より、午後も就寝時も長時間充満し、部屋中に入り込み充満して外に流れません。日々、許容範囲を超えています。藤井さんが嗜好品で吸っているタバコの陰で、体調が悪くなり苦しんでいる人が居ることを、藤井さんにご存知でしょうか？このタバコの臭いを吸うと、更に粘膜が痛くなり、夜中に家族全員がマスクをして寝なければいけない状況は異常であり、生活の権利が脅かされています。

常日頃から、安心、安全な団地にと...んん??... 尽力している藤井さん...私だよね?... (A 妻『そう』) 藤井さんなのに、たいへん遺憾に思っております。ナントカの限界を超えているので我が家に副流... (A 妻『我慢』) ... 我慢の限界を超えているので我が家に副流煙が入って来ないように、大至急ご対応ください。9月にじゅう...二十日、A 妻

藤井敦子「これ、戴けるんですよね？」

A 妻「これは... いや、これは、まだ...」(提訴後、証拠資料としてこの文書が提出される。)

藤井将登「ん～。もう完璧、うちが犯人？っていう感じにもう書かれていますよねえ」

A 妻「いや、犯人っていう言い方ではありませんねえ」

藤井将登「うちのせいだ、ということになっている。困ったなあ！」

A 妻「いやあ、吸ってない、って言うしね。じゃあ、一緒に、一緒に藤井さん、行っていただけますか？」

藤井将登「え？一緒に？なにがですか？」

A 妻「この出処をすぐに... (副流煙が) 入って来る (不明) (笑)」

藤井敦子「いや、なんであたしが、吸っていないのに、その、一緒に探す義務があるんですか??」

藤井将登「うん、わかんない、としか言いようがない...」

藤井敦子「私は吸ってない、って言っているだけのことであって、なんで私が一緒に探さなきゃいけないんですか？ (笑)」

藤井将登 (笑)

A 妻「いや、だからどこの家なのかなって。」

藤井将登「いやいやいや。」

A 妻「安心な安全な団地で一生懸命尽力して下さってるじゃないですか。」

藤井敦子「いやこの件はAさんが... う～ん」

A 妻「私はそれは藤井さんの家のこのクローブだっていうね、うんと、あの、誰かが外国行ったおみやげでらった、このクローブってやつを、あの、藤井さんが、吸い始めて、...」

藤井敦子「あのね、曲解された話を、あの、あの、合っていると思いで話されしまうと、」

藤井将登「今の話は何なのかな？」

藤井敦子「えっと、ずっと昔に、まーもん (将登のこと) があの、えと、車で茶色の葉巻を吸っていたのを見たことがある、って云われて、それで」

藤井将登「そうそう、そうそう、それおっしゃってましたねえ」

藤井敦子「まーもん（将登のこと）、今吸ってる？って言ったら、今吸ってない、と。でもこのあいだ、Aさんがいらっしやったときに、ずっと前にあれ、もう何年も前にもらったっていう話はしましたよねえ」

A妻「そうじゃなくて、このクローブの。インドネシア産の、あの、甘い香りの？クローブっていう（不明）あれするわけですよええ、サーファーやなんかの人気のある、これ、タバコですよええ。インドネシア産のこのクローブ、ガラム社のクローブっていう...」

藤井敦子「それが？それがどうしたんですか？」

A妻「やつを、なんかお土産でもらったりしたことは無いんですか？」

藤井敦子「お土産でもらったこと??」

A妻「外国に行かれた方からお土産でもらったとかそういうことはないですか？」

藤井敦子「いえ、ないですよ？うん」

A妻「てことはないですか。」

藤井将登（笑）

藤井敦子「あの、今ここで、疑っておられることを...んーと」

A妻「疑うっていうか...」

藤井敦子「疑っておられることを、色々疑っておられることを、えーと『被害』だと言うのであれば、あ、あのその、健康被害を『被害』だと言うのであれば、近隣の住民から、あの証明のつかないことで、我が家としては、証明はつけられないけれども、やっていない、としか言いようのないことを、あの、このような書面を持ったり、ま、Tさんを巻き込んだのも、一種の被害な訳ですね。で、それについてのご自覚は無いんでしょうか？ご自分たちの立場を主張されるのはよく分かります。でも、なんにも、ええと、じゃあ、これ、どうやって証明つけるんですか、と云われると、お金もかかることだし、そこまでやる気は私は無いですけど、そうである以上、延々と云われ続ける、ということの、あの、『被害』を私も訴えようと思えば訴えられるんですが、あの、そんなことをしても全く意味がないと思っているので、あの、我が家としては、あの私は吸わないってことと、旦那は以降吸っていない以上、何も無いんですね。それ以上のことは。だからそこを、そのあと、気になさるんであれば、ご自分の力で、また色んなかたに相談されるのは、私どもとしては何も出来ませんが、私達と一緒に探すという義務はどこにもないんじゃないのかしら。」

A 夫「ただ、私らはね、これ、まああの、状況しか分かんないんで、あの、例えば風が例えばクルクル、例えばうちらで付けてるその風向（裁判でリボン1本が静止画で提出されている。）が、例えばこっちからこういうふうになんか吹くとか、こっちからこういうふうになんか吹くとか、そういうことであればかなりまた違って来てんですけど、殆どが80%以上風がこう...」

藤井敦子「まあでも、多分そうでしょうねえ。そうでしょう、うんうん。」

A 夫「仕方ないですよねえ。まあ、それで、もうひとつは、ご主人が、6日に会った時に、タバコは吸ってるって話だったんで。まああの、これ、状況でみて、やっぱりご主人の（不明）藤井さんとこかな？というふうになんか考えたの、あの...」

藤井将登「うん、そこは不思議じゃあない、とは思いますがよ。」

藤井敦子「それと一応事実だけを言っておきますと、あたしは四六時中家に居るので、こないだあたしが座ってた場所があるでしょう？ね？Aさん座って、で、私は家で英語塾やる時もあの位置なんですね。それで、生徒教えてる時もあそこに座ってますし、それから地域の仕事色々やってるので、パソコン作業してもあそこなんですね。それで、えーと、料理はそんなにしません。もう一日晩ご飯を作るのに1時間絶対かけないというポリシーなので、それ以外に（笑）もう私はポリシーにしているので、換気扇の所にこうやって立つってことはちょっと考えられないけど、電話をしてる時によくウロウロしながら電話をするので、あの辺りに影が見えるってというのは、それは当然のことかなとは思いますが。ただ、それをチェックされてるというのは、（A妻『いやチェックは』）今までは疑われてるということなので、了解しましたが、今後については...」

T氏「あっはっはっはっは。今後はちょっとね！」

藤井敦子「今後については、あんまり気持ちのいい話でないんで、あのう、」

藤井将登「そうですね。」

A妻「ただ、どうしてもこのね、（不明）ってる香りなんです。」

藤井敦子「わかりますよ。今までは、わかりました。でも今日以降の話しですね。今日以降、あのう、うーと、（笑）まーチェックされてても、チェックしてますということは少なくとも言わないで下さい。（笑）そうして頂ければ忘れて暮らせますので。ありがとうございます。」

一同（笑）

T氏「まあだから、事実、まあ、想像は別にして、事実はまあ、例えば、まあこないだからお話聞いていて、あの、ご主人が吸われているタバコの臭いであると。でもその時はご主人も吸われていた、と。まあこれは事実かもしれないけど、その臭いとその本当にタバコの臭いか、これはまあちょっと分からないけど、その時は吸われてた、と。これはまあ、事実の点で、その他はもう最近タバコ吸ってませんよ、と言うにもかかわらず臭



いがするとなると、ぜんぜん違う理由と。」

藤井将登「しかも私が居ないときでもにおい、臭いと...」

T氏「う～ん、まあそれは事実はどうかから来ない限りあり得ない、と。で、構造的に、こないだもお話したけど、通じてるのは、この躯体はもうまったくコンクリートで囲まれてるからね、あの（煙は）出ない筈なんですけど、共通孔は排水が共通孔なんですよね。だから炊事場の排水とトイレの排水、それからお風呂の排水がずーっと下から上までドーンと上がっているんですよね。それはそこに漏れたら上に行くと、これはまあ事実ですよ。で、ま、そんなに漏れるもんじゃないけども、その辺はまあどうなってるんかね、それはちょっと分からないから、だけど全然居られないときに臭いが行くとなると、まあ染み付いたやつ上に上がるということは常識的にはそんなには考えられないですよ。発生してるものが上に行ったりするけれども、ぜんぜん居ないときに臭いが行くとなるとね、ちょっとまあ別、例えば薔薇の花が植わっているのが行っちゃうとかね、そういうのはありますよ。けっこう強い、あのベランダに花の匂いがあると、あの、行きますよね、これは。だから、まあ別の次元かもしれない。まあその辺はちょっと調べてみないとわからないけれど、ま、居られないときに臭いがするとなるとまた全然、それで誰も吸ってない...。最近では吸っておられないんですか？」

藤井将登「そうなんです。だからあれから、タバコ吸ってないんですよ」

T氏「最近でも有るとなると、ちょっとまた」

藤井将登「車で外の時はときどき吸ってますよ？まだね。でも、またそういうこと言うと、今度は車かな？とかって云われるのかなって（笑）」

藤井敦子「もう1点ね、その、あの、ま、ちょっと潜在意識的な問題だと思うんだけど、『何か原因を見つけると安心する』という精神的なものが一つあると思うんです。何かあった時に、ここに、あの本当は熟考してね、ちゃんと証明して相手に言うんであればちゃんとこうあの、それこそ科学的な実証をもって言わないと、あの非常に失礼になったり名誉毀損になったりする場合もあるかと思うんですが、でも、その、あの、自分たちのご議論の中で、何かをこうやって見つけてしまうと、ここでもう考える必要がなくなる、ということがまず1点と、じゃあその対象者を誰を選ぶかっていう時に、やっぱりあたし自体はもう団地で非常に目立ってますので、あの、そこに対して、元々自分の持っている感情なども投影しながら、あの、そこを理由にするというのが、こう潜在意識の中でそういうものがあるのかな、元々。そうでなかったら、何にも関係ない人に対して、あの、殆ど知らない人に対して『あの人だ』って言って指をさすのはとっても大変なことだと思うけど、どうしても私は色んな場面で『藤井さんが』っていう、やられやすいタイプなんです。いずれにせよ。」

A夫「いえいえそんなことない。」

藤井敦子「(笑) ありがとうございます。」

A夫「そんなこと絶対ない。」



沈黙

A 夫「絶対ない。」

藤井敦子「ふん」

A 妻「ね、感謝はしてますもんね。人の嫌がることをね。」

藤井敦子「あ、いやいや、奥さまについてですよ。それは奥さまが前回2時間ぐらいおうちに来た帰る時にね、あの、藤井、あたしが『犯人』という言葉使っていらっしやいました。で、うちの旦那がちらっと見て、あたしが犯人って言ったけど、私が吸っていないことが家にいて家が臭ってる、ってこともないし、あたしが、突然来てね、こうやってタバコを隠してるとかもないし」

A 妻「犯人なんて言った覚えなし」

藤井敦子「犯人っておっしゃったんですよ。」

A 妻「ないですよ、犯人なんて。」

藤井敦子「言葉をね、そういう言葉が使われたんですよ、実際に。」

A 妻「犯罪じゃないですもん、だって」

藤井敦子「うん、そうですね？そうですね？でも」

A 妻「タバコを吸う（不明）」

藤井敦子「そうですね、お互いにパツと言ってしまったたりすることとか曲解がありますから。」

A 妻「(不明) は言いますよ。」

藤井敦子「いいですね、その時にね、奥さま謝罪して帰られたんですよ。」

A 妻「えっ??」

藤井敦子「どうも申し訳なかったですと。疑ってね、あの一非常に申し訳なかった、ということで帰られたんです。でも、あの帰られたんだけど、あの、まーそれがどれぐらい私の中では「持続出来るかな？」というのがあったんですが、2日後ね、Tさんに（から敦子にこの会合についての）連絡があった段階で、あの一あつ「これはもう続くな」と（笑）。だってあの時に謝罪して帰られた、..」

A妻「謝罪なんかしてませんよ！なにウソ言うのー！」

藤井敦子「(困って笑いながら) だから、もう、無意識なんだよね、きっと、無意識なとこ、多分」

A妻「何よ、もー！」

藤井敦子「(困って笑いながら) 多分、それは、多分ね、一般人の人んちに長い間お邪魔してすいませんでした、(A妻『うん、そういう意味よ』) 疑って申し訳ありませんでしたということはおっしゃってました、それは。その時には、だから、ま、無意識にやっておられるところもあるのかと思うのですが、(A妻『いや、その時は藤井さんに申し訳ないと思ってますもん』) そのことがやっぱり害になる部分があるので、やっぱり、ご自分のご家庭で喋っていることと、「他」に出す時は、やっぱり変えていかないといけないと思うんですよね。んで、今の段階で私誰にも言ってないですよ、この件。言ってないですよ。でも、これね、今回の件で、うちの階段とかにもトントンって行ってらっしゃったって話を聞いているんですね。そうすると、これが間違っただ話になれば私も喋りますから。うん。だからお互いにそれは気をつけなきゃいけないと思いますよ。「自分がそう思ったからって吹聴していいという問題ではない」ということを、よくご自覚をしていただくようお願いいたします。」

A夫「あれ、あれじゃない？あの一(不明)でタバコ吸ってるかどうかをお聞きになってるじゃない」

藤井妻「いやいやだって、うちは全然そんなの今、それはやっぱり今気にされてるご家庭がね、あの一、やるべきことであると思うし、それで、んーと、ありもしないことでね、うちの名前を出されているのであればね、『うちがそうでない』ってことは本当は否定して歩いて欲しいわけですよ。どのご家庭に言った、誰に相談したか知らないですよ？でも、どこかに行って『これは藤井さんのところの疑惑がある』とか『甘い香りが』って言ったのであれば、うちはもう吸ってないわけだから。それはあの、『あれは間違っていました』ってことで、本当だったら自分、ご自分達が歩かれたおうちに対して『間違っただ情報でした』と言うのがうちに対する誠意だと思いますよ。そこまで求めませんが、求めないですけど、あたしだったらそうしますね。動くってことはそこに責任が生じているということで、自分達の思いのままに行動して何もしないっていうのは無責任ですよ。だから行動する段階で、こういうことをする段階で、このことの結末までちゃんと自分がどう責任をとるのか、こういうことを相手に言った、誤解の内容で言ったことに対してどう、でうちは多分そこ追及しないタイプだと思うんですけど、これ、やる人だったらやっぱり、そりゃ、あの、もの凄くおっきい問題にする人もいると思うんですね。名誉毀損ってこと十分あると思います。で、証明するの簡単です。私が吸ってないこと証明するのは最も簡単だと思います。いくらだって科学的な医学的な検査だってあるわけだから。ハーとか息吐いたりとかね、血液検査すればすぐわかることだろうし。不意打ちで抜き打ちで来てもらったっていくらでも構わないですが、そこまでされるんですか？ということ。だから、あの、そのことで被害に合って悩まれているのはわかるけども、違うということは、もう冷静に受け止めて、思い込みで事を進められないことだけは望みます。」

A夫「うん、うん。」

藤井敦子「うん」

藤井将登「ま、ある意味ね、僕はちょっとホッとしてたんですよ。」

A 夫「うーん」

藤井将登「あの一『まだね、くさい、まだ臭いが入ってくる』っていうのを聞いて、あ、じゃあうちらじゃないんだ（笑）と、原因はね。何だかわかりません、その他の原因は何だかはわかりませんが、とりあえずうちらじゃないことは確かだなと。あ、まだ考えられるのはその、うちの「固有の臭い」みたいのが漂ってっ（笑）っていうのは、ね、（不明）犬とかだったからわかるのかなって思うんですけど（笑）」

A 夫「藤井さんとこの、その一、臭いが漂うってくんだとしたら、あの一常時入ってくるわけですよ。」

藤井将登「ふっ（笑）そうですねー。」

藤井敦子「それでね、換気扇をね、結局、その、まーうーあたしがね、『旦那が防音室で吸ってる』っていうのも、何の確証もないわけですよ。普段そんなにタバコとか意識して暮らしてないので、あーそうなのかなと思ったぐらいのことで。まー奥さんもそういう風に、ね、あの思われたかと思うんですが。それは私がそういう言い方してるから、それはまーあの一わかるんですけど。あの時旦那に聞いたら、『いや、換気扇でしか吸ってない（防音室以外ではの意味）』って言うから『あー結構気をつけてるんだ』ってあの会話（9月6日）の中で思ったんですね。でもそうするとですよ、換気扇つけてる時間ってすごい短いんですよ。だって料理する時も（夫に向かって）あたしあんまり換気扇つけないんだよね（笑）（夫『うん』）で、旦那がもうしょうがないってつけるぐらいで、あたし自身が換気扇をそんなに、だから恐らく旦那がタバコの時以外は換気扇をつけるっていう習慣がない。」

藤井将登「いっつもこの人が料理している時に、僕が換気扇つけて消すんですよ（笑）」

藤井敦子「だからそんな時に臭いするの当たり前だぐらいに思ってるので、あんまりその換気、換気とか、あの一、いうタイプではないんですよ。」

A 夫「んー」

藤井将登「全然ないね（苦笑）」

A 妻（ため息）

A 夫「反対に、藤井さん達のお考えっていうか、情報っていうかあれで、これってもし今の状況で考えたらどういうこと想定されますかね。何かね、藤井さんそこじゃなかったらね。」

藤井将登「たぶん、、、はい、、、あの、、失礼ですけども思い込みなんじゃないかって思うんですよ。」

A 夫「(不明) おたくー藤井さんとのね、」

A 妻「思い込みじゃないかって (小さく) ハッハッハッ (笑)」

藤井将登「うーん。」

A 夫「えっ?」「えっ何て?」

A 妻「思い込みじゃないかって、うちが」

A 夫「いや、うちの?」

藤井将登「うーん」

A 夫「いやー、それはない。それはだっって入って来るんだもん。あのーいまーいずれあのーもしあれだったらあのー、このー何ですかあの、これ光があるらしいですから。それを、あの、つければ例えば、あの下からの一酸化炭素だとか、そういう、あの、こう」

藤井敦子「あー違う、違う。多分その思い込みっていうのは、事実として入って来られるのかもしれないけれども、(夫に向って) うちに対して思い込みってことでしょ?」

藤井将登「ううん (No)、それも含めね」

藤井敦子「それも含めて」

A 夫「いえいえそうじゃなくて、あの、藤井さんところがーそれで、6日以降タバコ吸ってなかったとしたら、ま、それまでは吸ってたんでしょうけど、その、そしたらあと考えられるってことはどういうこと考えられますかね?」

藤井将登「わかんないですねー。」

A 夫「あのーお宅の、その、うちの中の、その居間での、が、流出する、臭いが流出するなんてことはないと思う、あの、あったとしてもそりゃ時間がこういう、あの、ある時もあるし」

藤井将登「そうそうそうねー、それもおかしいんじゃないですか」

A 夫「全然、ただ、お宅のじゃないと。それ以外のところからの何か入って来るってことですよ?今の時間帯で昼頃から11時頃(夜)11時12時まで入って来ると。」

藤井敦子「うん、うん、、ただ、あの、ここでね、あのーお話をしてね、あのーまたそれがおうちに持って帰ら

れて、それがちゃんと継続出来るのかという不安があるわけですよ。今日はねーじゃあ藤井さんとこじゃないんだねーってことで、ね！一応ご理解をいただいたと。でも、また、それが持ち帰られた時にやっぱり藤井さんところだって言って、いつまでも続くっていうのは、うちとしては望まないわけですよ。だから、あの、入って来るっていうのは、そこはあかし達が、それが事実だよとか事実じゃないとか言う立場にないし、それはAさんとこのみぞが知る話で、」

藤井将登「そーだ」

藤井敦子「あの一ただ、うちではないというこの議論については、あの一、今日そのために T さんという第三者を置いてね、話をしたので、あの一ご家族3人の中でね、でも一そうかなっていう話はあっても構わない（笑）かと思うんですが、他人に話す時にはね、あの一、そこを、その一疑いという確証のつかないものでね、あの一うちの名前をね、ずっと挙げ続けてね、それは一A さんところでは構わないけど、聞いた人やったりそういう印象になりますから。あの一、それだけはもう、あの一やめていただきたいな一というふうに思います。うん。うちとしては多分以上、それが一番、それ以上何も言うことはないかなと。」

A 夫「あまり、あの一、あまりじゃない、そういう話はしてないと思いますよ？色々」

藤井敦子「なんか奥様がコンコンって言って階段を、の人に」

A 妻「あっそれはね、タバコ吸ってるかっていう」

A 夫「タバコ吸ってるかとか」

藤井敦子「でも、これを読んでもね、その甘い香りの問題がね、そろそろ問題になりつつあるということを」

A 妻「ふっ（笑）」

藤井敦子「奥様が仰っているということは、A 家以外でもね、この甘い臭いの話が出ていてね」

A 妻「あーそりゃ何だろう、何だろうって」

藤井敦子「ね一、それでそこで藤井さんちかもしれないってことではもう出ているようなので、それについては撤回をして欲しいということですね。あの一、ご自分の責任でもって、良心が痛むのであればそれはされるべきであると思います。」

A 妻「それはないです。まだわからないです。まだちょっとわからない。」

藤井妻「まだ疑ってるってことですか？」

その他（笑いどよめく）

藤井妻「ハッハッハッ（笑）まだ疑ってるってことですか？」

A妻「いや疑うとか疑わない、じゃあこのね、花の香りのにおいはどっからなんだろうって。」

その他（笑いどよめく）

藤井妻「ハッハッハッ（笑）だからそれは藤井ってのまだ思ってることですね。（笑）だからそこなんですよー旦那さん！奥様が続けられる限りこの話終わらないっすよってこと、ハハッ、それは旦那様のコントロールにかかっていると思いますよ。男の人ってのは社会性にくさびを入れる役目だと思ってるんです。女の人ってのは往々にしてこういうことあるんです。（小声で言いにくそうに）でも家族の中で男性だけがそこにくさびを入れるので、それよろしくお願いします。」

A夫「だけどねー、あの一入って来るのは事実なんです。」

藤井敦子「だからそれはわかりました。」

A夫「だけどねー、そうするとこのー」

A妻「他に考えられない。」

A夫「風の向きから〜」

藤井敦子「考えなきゃいけないんです。考えられる（考えられないの間違い）じゃなくて。うちではないとなってる以上、考えなきゃいけないんです。」

A夫「それとねー」

藤井敦子「その選択肢を持たないと発展しないですよ。」

A夫「このタバコってのは普通のタバコ屋じゃ売ってないんですよ。ほとんどネットで買わないと、そういうタバコですよ。」

藤井敦子「だから（笑）一番、またー、またそれがねー（苦笑）、ここでこう言ったけどまだ嘘をついてるんじゃないかっていうことであれば」

T氏「ハッハッハッハッ」

藤井将登「イヤイヤ！」

藤井敦子「呼び出して話すことはないでしょ！そうであればずっとそう言って下さい、と。(笑) わざわざ他人を介して呼び出す、呼び出すってこうやったってことは、ここでの話を重んじるという意味ですよ？で、私達は自分達の100%誠意において『ない』と言っているわけです。」

A妻 (はあ～ため息)

藤井敦子「それを、またうちの旦那がもしかしたら吸っているんでないか、私(敦子)もこうやって言いながら、まだ本当は隠してるんじゃないか、と言って、言い続けるのであれば、それはご自由ですけど、私達がそこに時間を割く理由も何もないんですね。」

A夫「何もない。」

藤井敦子「あー(Yes)、大丈夫ですか？」

A夫「藤井さんは何、いつ頃にタバコ吸わなくなったの？」

藤井敦子「もうねー、タバコは元々長く吸ってないんです。」

A夫「えっ？」

藤井敦子「タバコを吸ってたのは20代。いわゆるその、20代の、ま、格好つけタバコみたいのがあって」

藤井将登「君と会った時は吸ってたかなー？吸ってないんじゃないかなー？」

藤井敦子「それで30ねー、30ねー、えーっとねー、」

藤井将登「記憶がないな。君が吸ってる、、」

藤井敦子「女の子が生まれる、うち8才離れてるんですよ。んで、下の女の子がお腹に入る前にやめてるんですよ。」

藤井将登「えー？それまで吸ってたっけ？まお(上の子)の時に吸ってたっけ？」

藤井敦子「うん、その時に数年吸ってる。多分数年吸ってます。だから若い時に、」

A妻「自治会の会長されてる時も吸ったことない？自治会長の会長されてる時。藤井さんが。」

藤井将登「まーいずれにしろ、10、20年前っていうことね？」

藤井敦子「あーあー自治、、、(考えながらA妻の質問に答えて)PTAやってる時か。」

A 妻「ここの自治会の会長やってる時ね」

藤井敦子「PTAやってて会長やってる時吸ってたかもしれないですね、うん、うん。」

A 妻「あ、そうだね。それは認めるのね。」

藤井敦子「うん、うん、うん、うん」

A 夫「うちのもね、チロツと聞いてるんです、その話は。あのー藤井さんってタバコ吸うんだっていう話を聞いてるんですよ。それはかなり、数年ぐらい前一吸ってね」

A 妻「自治会の会長やってる時ね。」

藤井敦子「ずーっとコンスタントに吸ってるわけじゃないんですよ。」

A 妻「だからヘビーだと思ってた、(笑)」

A 夫「だからーあのーそれは、例えば、あのー藤井さん、誰かさんとスナックで会ったとか。そういう時とかねー。」

T 氏 (笑)

藤井敦子「スナックで吸うって言うけど私お酒飲まないですのでー。ハッハッハ (苦笑) スナックでこうやって、お酒飲んでこうやって、もうお酒飲まないことももう言ってよーTさん、本当にもう勘弁してよ！！。あたしがタバコ吸うんだったら、スナックに行った時に (T氏も) 一緒に行ってますから、吸ってますよ！！」

T 氏「僕の見ただけでは藤井さんが吸ったことは見たこないし、お酒飲んだのも見たこないしタバコも見たこない。」

藤井敦子「本当に。お酒飲まないのも見てるでしょ？」

T 氏「うん、あやしいタバコも吸ってない (笑)」

A 妻「園ボ (園芸ボランティアというグループ) の人達と吸ったことあるでしょ？」

藤井敦子「えっ？園ボの人達と、ずっとー」

A 妻「自治会長の頃」



藤井敦子「自治会長の頃？だから自治会長の頃っていうと、もう10年以上前ですよ？」

A妻「そんな経つんだ？10年前なの？」

A夫「まあもういいじゃない、その一」

藤井敦子「だから一それは一私が一PTAの時。PTAの時には吸ってますので、その時の園芸ボランティアとも会ってますからね、自治会長の時はどうかかわかんないですけどね。」

A妻「まーでも（ため息）」

A夫「あの一藤井さんが吸ってても吸ってなくてもわかりました。」

藤井敦子「でも今吸ってないんですよ（笑）間違いなく10年吸ってないんですよ。」

A夫「はい。はーい。」

藤井妻「それだけ、もうわかって下さい。それ疑ってないですか？（笑）」

A妻「わかります。だって吸ってないって（不明）」

A夫「とにかく、だけどね一、じゃあ、あの、別で考えなくちゃいけないですね、そしたらね。あの一別な方法で。」

A妻（ため息）

A夫「そして藤井さんも、ご主人も吸ってないって言うし。」

A妻「私なんか藤井さんのご主人優しいから防音室も作って下さったっていうから、ま、空気清浄機有害物質もとれるの置いていただけたらなーなんて。そこまで言おうかなーって。」

藤井将登「空気清浄機もスタジオで使ってますけどね。あの一ティアックのそれは静電気型のやつで、あの、こう何て、ファンはついてないんですけどね、臭いとれるんですよ。」

A夫「あの一たとえばね、あの一藤井さんがあのこの（9月）6日の前会った時に、いやうちの主人はね一防音室で吸ってるから臭いなんか外になんか出さないわよっていう話で。」

藤井敦子「二重窓だしね。」

A夫「あっそうなんだー？って。だから、えーっ考えてみたら、4畳半でそんなバカバカタバコ吸ったら煙だ

らけで本当に（不明）」

藤井将登「でしょ？」

A 夫「そんなこと有り得ないよね？と。」

藤井敦子「そこまであんまりよく把握してないですよ。だんながタバコを吸うこと自体意識して暮らしていないので。」

A 妻「そうなんだ、..。」

藤井将登「そんなヘビースモーカーじゃないしね、もともとね。そのーそうやって6日から吸わないでもいられるぐらいのことなんで。」

A 妻「それは割とそうなんだなーっと」

A 夫「まーそうするとこのー外国のタバコ、同じ種類のタバコを誰か他の方が吸って、それがうちらに入ってくるっていうことですね。そうするとね？」

藤井敦子「でも同じかどうかもね（笑）」

藤井将登「でもね、同じかどうかもわかんないですよ。そのね、この前をそういうお話を聞かれたから、あっじゃあ、私いっつも吸ってるこのガラムっていうのと、その、バニラのコルトっていうやつー、がね、甘い香りするから、甘い香りどうのこうのおっしゃってたから、『あーじゃあ甘い香りってこういうのもあります。僕吸ってます、時々だけど吸ってますよ』ってサンプル差し上げたじゃないですか。で、そしたら今度はこういう話になってるから、あっその～やっぱり（笑）」

A 夫「いやいや、そうじゃなくてね、」

藤井将登「そのまま今度はガラムガラム（藤井妻「今度はガラムガラムだよね。」）コルトコルト、バニラバニラっておっしゃってるから。（笑）」

A 妻「だってわからないもーん。やっぱり。」

藤井将登「いや、その時点ではね、」

A 妻「うん」

藤井将登「前回の木曜日の、あのー6日の時点では、そんなバニラっていう話はなかったし、ね？」

A 妻「わからないんですよー、バニラかー（不明）」

藤井将登「何か花のようとか」

A 妻「そうそうー」

藤井「っていう話だったじゃないですか。」

A 夫「あのね、ちゃうちゃう、そうじゃなくて、うちらもー私も過去に吸ってましたから、国産の、そのタバコ吸ってましたから、そうするとそのうちの子供らも女房もみんな知ってるわけですよ。その国産のタバコってのは『タバコ』っていう煙が出て来るやつで、本当『これタバコだー！』っていう、それでスーッとこういうふう消えちゃう。だけどそうじゃないこのタバコっていうのは、色んなこの甘い香りのする、あのーこれがそういうふうなお宅から（不明）前から、そういうのが甘い、何かね、タバコらしからぬ何か、あの、臭いのするそれでタバコみたいのがそういうものが入ってくる。

藤井将登「そういうことはおっしゃっておられましたね。」

A 夫「だからそうすると、そういうタバコだっっていうのはわかったわけです、うちらも。だから、そこにたまたまご主人がこういうのだっっていうので、だいたい符号が一致したってだけの話です。」

藤井将登「そうですよね、あーうん、一致したー！って感じですよ。ふふふ（笑）」

A 夫「という発想をしたんですよ。」

A 妻（ため息）

藤井将登「それはわかります。」

A 夫「だけど結局ねー、あのーインドネシアンとこのレモンとか、全部調べたけどやっぱりね、同じような種類のそういう臭いの、それから香りのするタバコですよ？」

藤井将登（無言）

A 夫「だからあの、一概にあのーそうじゃなくて！あのーこのーお宅に行く前から、こういう臭いのする香りのする甘ったるい、そういうのはもううちの中で話し合い『何だろうね？』って、それからこれ『これタバコだね』っていうような形でしてたってことですよ。」

藤井将登「でもだからそれが、タバコかどうかはわからない、、、ですよ、ハッキリとはね、そのさっき芳香剤どうのこうっていう話もありましたけど。」

A 夫「あのね、これってね、あの一最初に起きるのは、あの一これ何の臭いだろうっていうそっから始まって。ね、しばらくしてある程度経つと、この咳とか喉とかそのまず最初にそういう方にいっちゃう。」

藤井将登「う～ん。」

A 妻「甘い香りプラス排気ガスっていう感じ。排気ガスのような。」

A 夫「だから、それで、よくよくあの一この臭いを、でこの臭いってのはかなりこう漂っちゃう、長い間」

藤井将登「う～ん。あ、えっと、あのガス大丈夫ですか。」

A 妻「ガス？うちのガス？どういう意味？」

藤井将登「都市ガス。漏れてないですか。」

A 妻「大丈夫ですよ、だって点検にきてくれますからね。ちゃんと。」

A 夫「あれついていますもん。」

藤井敦子「あと、煙って上にあがるっておっしゃってるじゃないですか。」

A 夫「えっ？」

藤井将登「あたたかい煙ね。」

藤井敦子「あと煙って上にあがるっておっしゃってますけど、奥様いらっしゃった時に、こう下の方に停滞するって言うとおっしゃって」

A 妻「何っていうかな。」

藤井敦子「だから、上にあがるんだったら上にあがるのかなと思うんだけど」

A 夫「ちょっと言っている意味がわからない。」

藤井敦子「上にあがるっていうことだったんだけど、家の中の下にね（A 妻『いや、そじゃ』）、何か濃厚なあれがね、漂ってるっていうふうにおっしゃってて、煙は上にあがるんであればどんどん上に行くのになって単純に思っただけなのと、その家の中でそんだけ濃厚であればね、もうこの周辺でももっと（藤井将登『外はもっと強いですよ』）他の家庭でも同じ現象が起きてないと、A 家にだけある臭いがシュッと、空気と一緒にこうやってこういう隙間に全部臭いも入ってしまうので、特定の家だけに入ってことは、あの、あり得ないと

思うので周辺から同じ苦情が、あの一出て、もっと言うとうちで臭ってもいいはずなんですよね。うちだって窓開けるとその嫌な臭いが来て、あの一、っていうふうに、なっていないってこと？」

A 夫「あの一。」

藤井将登「いや、うちから出てるんだったらうちの方がもっとすごいその臭いになってるはずだよ。」

藤井敦子「もちろん、うちが出てるんだったら、(笑) うちはまだもっと凄い臭いがしてないといけませんよ。」

A 夫「あの一、そういう話をされてる方もいらっしゃいます。」

藤井敦子「あーそー。その甘い臭いがするっていう。」

A 夫「えーするって。あーこれが、何だか始めわかんなかったっていう方はいらっしゃいます。それは、聞いてます。」

藤井敦子「うちじゃないってことは言っておいて下さいね。」

A 夫「ん？」

藤井敦子「うちではないってことは言っておいて下さいね。そこまで話を正式にしましたということ。」

A 夫「いえいえそれはただ、あの一そうですかって聞いただけ。」

藤井敦子「うん」

A 夫「だからそういうのは、それから、あの一臭いよりもなんか最近咳が出始めてる一とか」

藤井敦子「んーだから全ての原因にね、私になってるってのは物凄い心外なわけですよ。全ての方の病気の原因が (笑) 特にあたしになってるってことですよ。藤井家どころかやっぱり最終的にこれは私だという、この文書自体も。うん、そこまでの責任は私生きていて誰にもとれないです、個人個人の病気に対して。それを人に対してね、他の方のそのところまで特定の個人に原因があるということ、こうやって文書でつぎつけるというのは、よほどの勇気があることじゃないと出来ませんよ。これ、今日いただいて帰りますけど。」

A 妻「いいですよ。」

藤井敦子「何かあればこれと、ね、A さん、やることには行動には責任が伴ってます。今日の会話も全部録音してますし、これ (と録音テープを見せて) あの、行動なさる時に非常に気をつけて下さい。自分達の思いのままに、確証もなく、疑って、行動をとるとするのは非常に危険な行為であるということ。あの、自分で

わかっていないといけないと思います。」

A妻（ため息）

藤井敦子「じゃっいいですか、今日は？ここまでで。よろしいでしょうか」

A妻（ため息）

藤井敦子「はいっ、ありがとうございました。」

藤井敦子「いいですか、Tさん、ありがとうございます。」

T氏「いや、ご苦労様」

藤井敦子「もうこれ以上この件についてなんにももう言いませんので。言うこともありませんし。うん。」

T氏「わかりました。」

藤井敦子「ただしそれがまた今後、聞き漏れてきたら、またこういうもの（文書・録音テープ）を活用させていただくことがあることだけは言っておきます。そうでない限りは、Aさんもお理解くださった、ご理解くださってね、きちんと対応してくださったということなので、感謝を、あの、しますので、うん、よろしく願いします。」

T氏「まあ、今日の話は一応オフレコにして、両者のお話と、いうことだけに留めておいた方がお互いにその方がいいと思いますよ。」

藤井将登「まあ、その方がいいと思いますよ。」

T氏「いいと思いますね。ただそれ以後、まあ発展するならもうちょっと実証するとかなんかがないと」

藤井敦子「いや、もうこんなこと言うと、あたしからすると本当、恥をかいてしまうのはAさんの方だと思いますよ。」

A夫「ん？ん？」

藤井敦子「こういうことをね、あんまり公にしてね、今回当事者だからいいですよ。でも、あんまり他に公言した時もあたしは出る範囲によってね、やっぱり黙ってないと思います。うん。今回Tさんだからいいですよ。良き理解者であるからね。とか〇〇さん（集会所の管理人）であったりする分にもいいけど、これが（管理組合の）理事長とか、あの、そういうところに行ったら、私は、あの、誤解されてしまいますし、本当に、第三者に。特に先入観持っている人は、こういうことをまた種に色々言いたい人もいるわけですよー、うん。」

そうだった時に、何が事実で、誤解してもらおう、ね、あの、色んな地域で誤解されたりとか管理組合で誤解されたりするのは、あたしはそれ自分の責任だからいいんです。それは受け止められるんですよ。私の中で。管理組合のことで何を指さされても。でも、これはね、困るんです。事実ではないから。そこまで私は責任負えないですから。んで、そこまで（私という存在が）目立った以上、ここまでされても人にしょうがないのよ、と言われることもないでしょうし。」

A 夫「連合でも一生懸命活動されてね。」

藤井敦子「そう。でも連合でもね、色々言われていたとしても、それは自分でわかってるし、それはいいんですよ。でもこの件は違うということ。だからといってその人間に関して何でもかんでもやっていいわけじゃ決してない、ということですよ。（A 夫『そりゃそう』）うん、本当に。お金ないですけど、お金あったらこれ本当にあたし名誉棄損と思ってますから。」

A 夫「だから、これ（A 夫が配布した資料）には、あの一、お断りしときますけど、藤井さんところが断定的な書き方はしてないわけですよ。」

藤井敦子「でも奥様のやつ（手紙）はもう断定的でしたよね？」

A 夫「いえいえ、そんなことないと思います。」

藤井敦子「いやそれはもう、奥さんをちゃんと言い聞かせて下さい。奥さんをちゃんと言い聞かせないので、旦那様が出したものは断定的でないってわかってます。奥様（の出した手紙）は断定的だと思っています。で、まだ断定的である可能性もあるかもしれないと思っています。そこを言い聞かすのはやっぱり一家の長であるご主人の責任なんです。そうでないからこういうことになってるんです！」

A 夫「ふーん？」

藤井敦子「わかりますか？」

沈黙

A 妻（ため息）

藤井敦子「行こ」

藤井将登「うん、いいんじゃない。よろしいですか（T 氏に向かって）」

T 氏「私はまー（笑）あれなんで。」

藤井将登「（T 氏に向かって）すみません。ご足労かけます。」

T氏「あの一、あとなければ」

藤井将登「うん」

藤井将登（A夫妻に向かって）「あの一、原因というか、なくなる、臭いなくなるといいですけどねえ。」

T氏「そう、そうね。ないとね、そう思います。」

藤井将登「うん」

A夫「うちのはね、だけどね、いずれにしてもね一、これはもう毎日のことですから、やっぱ考えなくちゃいけないです、やっぱり自分としても。」

藤井将登「うん」

藤井敦子「なんかまあ、積極的に自分で探すってことはないけど、何か耳にしましたら、あの情報があったら、」

A夫「教えて下さい。」

藤井敦子「もちろん！はい、はい、はい。わかりました。」

藤井将登「じゃあ失礼します。」

藤井敦子「ありがとうございます。」

T氏「じゃっまあ、どうも」

A妻（ため息）

散会